

祝 登別温泉開湯150年特別企画

特集 湯のまちに住む

今年、江戸時代末期に開湯した登別温泉が150年を迎えました。この年を記念して、登別観光協会が主体となりさまざまな催し物が開かれます。

今月号では、市史 ふるさと登別を参考に登別温泉が歩んできた歴史とこれから行われる記念事業をご紹介します。



▲登別パラダイスのところにあった『滝の湯』

登別温泉の開湯

登別温泉は相当古くからアイヌの人たちに知られていたと思われ、登別の語源は、アイヌ語でヌプルベツ、『色の濃い川』という意味で、昔、登別温泉地獄谷からのお湯が、川の水を白く濁らせるほど湧き出ていたと考えられます。

北海道の名付け親と言われ、登別市の名称を『胆振国幌別郡』と定めた松浦武四郎が、1845年（弘化2年）にこの地を訪れたときには、道路さえなく、川の中にむしろを敷いて温泉に入っていました。

この登別温泉の開発が本格的に始まったのは、今から150年前の江戸時代末期。1838年に幌別場所の請負人となった岡田半兵衛が、箱館奉行の入湯という出来事から、1858年（安政5年）に道路を開削し、止宿所（共同浴場）を建て、滝本金蔵が湯守（温泉の管理人）となったのが始まりと言われています。

それまでは、登別温泉に行く道らしきものがなく、『川を北上』との記録があるほどです。岡田半兵衛がこのときに開削した道路は、登別小学校通りから中登別町のコンビニエンスストア前に出る道路でした。

中登別から登別温泉までの道路は、明治14年に滝本金蔵が開削して、明治24年から客馬車が走るようになりました。